

國學院大學學術情報リポジトリ

近世神道思想における聖徳太子の役割について：
『旧事大成経』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-23 キーワード (Ja): 聖皇本紀, 救世観音, 根本枝葉花実説, 月光童子, 近世戒律復興運動 キーワード (En): 作成者: 菊池, 圭祐 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001671

論 文 要 旨

学籍番号	223107	氏 名	菊池 圭祐
論文題目： 近世神道思想における聖徳太子の役割について—『旧事大成経』を中心に—			
<p>本論文は、『旧事大成経』「聖皇本紀」の記事を中心とし、近世仏家神道思想における聖徳太子の役割を明らかにするものである。従来の先行研究では特にその成立過程が注目され、これまで十分な検討がなされてこなかった『大成経』本文を詳細に読解することを通じ、そこに内包されている思想の一端を明らかにする。その上で、数多く存在した信奉者は『大成経』のどのような内容に共感し、受容するに至ったのかという問題に対してアプローチを試みた。本論は『大成経』の思想史上における価値を明確にし、かつ適切な位置付けを探る第一歩である。</p> <p>はじめに、『聖徳太子伝暦』や「聖皇本紀」等に見える穴穂部間人皇女懐胎説話の比較検討を通じて、『大成経』では従来の仏教に基づいた表現から、神道を意識したかのような表現に改められていることを確認した。そこから聖徳太子に求められた役割は古代・中世と、近世『大成経』においてでは異なるものであると仮定し、考察の出発点とした。</p> <p>次いで、古代・中世においては聖徳太子が「救世観音」と目されていたという事実について、なぜそのような信仰がなされてきたのかを二つの視点から考察した。一つは『伝暦』が成立した十世紀頃の日本における気候変動の影響と、それに伴う疫病や災害に対する聖徳太子の社会福祉的救済。そしてもう一つは、仏教的価値観においてしばしば差別や蔑視の対象とされがちな女性を含めた、末法の世における人々の死後の救済を担う存在であるという点である。</p> <p>これに対する、近世『大成経』における聖徳太子の役割も二つの視点から考察した。一つは、中世に展開した聖徳太子による根本枝葉花実説が「聖皇本紀」においても踏襲され、そこから近世の排仏論に対するアンサーとしての神儒仏三教一致説を主張するという役割。もう一つに、仏典に登場する月光童子との関係から、近世における僧侶の墮落を受け、正しい仏教者としてのあり方に立ち返る必要性を説く存在としての役割である。</p> <p>加えて、以上のような「聖皇本紀」にて示された役割を持った聖徳太子の存在が、近世戒律復興運動に何らかの影響を与えた可能性についても言及した。後の『大成経』信奉者たち或いは、『大成経』と同質の神道説に触れたと考えられる人物の中には戒律を重視する考えを持った者も存在し、そうした彼らの思想形成には『大成経』が少なからず関係したのではないかという問題提起をし、今後の課題とした。</p>			
キーワード (5 語)			
聖皇本紀 救世観音 根本枝葉花実説 月光童子 近世戒律復興運動			